

新しい友達^{ともだち} — ぼくと栄一^{おうえい}翁^{おきな} —



「新一万円札に渋沢栄一^{とつぜん}突然のニュースだった。本当にびっくりした。」

ぼくが生まれる前から、福沢諭吉^{ふくざわゆきち}の一万円札^{さつ}が使われている。その前は、聖徳太子^{しやうとくとくたいし}。

どちらも教科書にのっている、歴史^{れきし}の中の偉人^{いじん}だ。栄一翁^{おうえい}は、そんな二人に続いて三人目だ。

新聞には、「日本資本主義^{しほんしゆぎ}の父」、「地元深谷の誇り^{ほこ}」、「渋沢の考えを現代^{げんだい}にも」という大きな文字が並んでいる。栄一翁が生まれた深谷市はもちろん、埼玉県全体が喜^{よろこ}んでいる様子がテレビでも放送されている。

「すごいな、なんだかうれしいな。」

お父さんの言葉に、ぼくも思わず笑顔になる。

栄一翁^{おうえい}といえは、「立志^{りっし}」と「忠恕^{ちゆうじよ}」と先生が教えてくれた。夢^{ゆめ}やころろざしをもつこと、同時にまごころと思いやりを大切にするのができたすごい人だ。たくさん

の会社をつくり、周りの人のため、社会のため、日本のためにいろいろなことをしてくれた人だ。そして、今度はお札の顔に・・・。

でも、「夢」や「こころざし」って、ぼくには、少しむずかしい。口に出すのは、なんだかはずかしい気がする。「夢はサッカー選手」、「夢はパティシエ」とか、「めぐまれない子供たちを助きたい」などと、堂々と言える友達が、少しうらやましい。四年生の三学期には、二分の一人式で、自分の将来の夢について、発表する。ぼくにはまだ、自信をもって「夢」と言えるものが見つからない。そもそも、ぼくの下さ、長所ってなんだろう。たぶん、栄一翁はたくさん夢をもち、かなえた、特別な人なんだ。

（近くて、やっぱり遠い人だな・・・。）

土曜日の昼、久しぶりに、知り合いの家族と、いっしょに農林公園でバーベキューをしようと集まった。お肉やネギ、トウモロコシが焼けるにおいが、たまらない。



「ねえ、栄一翁って、どんな人？」

とおるから、聞かれた。とおるは、お父さんの友人の子で、小さいころからいっしょにキャンプをしたり、海に行ったりしている大切な友達だ。静岡県しずおかに住んでいるから、「渋沢栄一」についてはあまり知らないようだ。

「たくさん会社をつくって、いろいろな人のためにがんばった人で、深谷市生まれなんだ。それから・・・」

あまりうまく説明せつできない。「ふーん。」と言いながらお肉をほおぼるとおるの様子に、なにかくやしいような、はずかしいような気分になった。そのまま、すっきりしない気持ちでとおると別わかれた。

「どうしたんだい？」

夕食の時、いつもとちがい、だまって食べているぼくに、心配したおばあちゃんが

話しかけてきた。

「ねえ、渋沢栄一翁わうって、どんな人？」

ぼくは、とおるから聞かれたことと同じことをおばあちゃんに聞きながら、うまく説明できなかったことを打ち明けた。

「そうだねえ。」おばあちゃんは少し考えて、ちよつと笑いながら答えてくれた。

「栄一翁は犬が大好きすでねえ。飼かっていた犬を布団ふとんの中にまで入れて、お母さんにおこられたことがあったそうよ。本が好きで、読みながら歩いていて、みぞにはまったこともあったそうよ。」

（えっ、栄一翁が・・・、知らなかった。）

夕食後、一人になって、改めて栄一翁わうについて、考えてみた。ぼくは、社会科の授業や道德とくの授業じゅぎょうで、先生方の話を聞いて、わかったような気になっていただけかも

しれない。栄一翁が子供こどものころのことは、ほとんど知らなかった。そのあとのことだつて、上手に説明できるほど知っているわけでもないのに、勝手に特別な人だと思っていた。

（ぼくと栄一翁つて、そんなに違うのかな・・・。）

何だか、子供のころの栄一翁に会つてみたくなつた。もし同じクラスになったら、友達になれるかな。

ぼくのころの中にうかぶ栄一翁が、笑顔になつた気がした。

（新一万円札に渋沢栄一翁か・・・。）

なんだか、遠く感じていた栄一翁だけど、もう一度自分なりに調べてみたい。まずは、もう少しくわしくおばあちゃんから、話を聞いてみよう。もつと栄一翁が身近に感じ

られるように。

「栄一翁と友達になる。」
ぼくに、新しい目標ができた。



ゴミ拾いはぼくらの手で

「どうしてゴミ拾いをやらなきゃならないんだ。」

ぼくの気持ちはしずんでいた。今日は道端に落ちていたゴミを拾いながら登校する日だ。

ぼくたちの学校には、学期ごとに登校しながら地域のゴミ拾いを行う活動がある。登校班の班長が袋を持ち、通学路に落ちているゴミを拾いながら登校しなければならぬ。

「何で班長が袋を持つんだよ。」

こんなぼくの不満をよそに、登校班のみんながぼくのゴミ袋に、拾ったゴミをどんどん入れていく。ぼくは、

「あつという間にゴミがいっぱいになるんだ。ゴミ袋を持って、学校までの長い道のりを歩くのは本当に嫌だなあ。」

教室へ入ると、同じクラスの健太と裕斗が不満を言い合っていた。

「どうして、こんな面倒な活動があるんだよ。」



と、健太が言った。裕斗も

「そうだよ。登校班で来るだけでも、班長として大変なのに。」と大きな声を出している。

(その通りだ。)

ぼくも思わず心の中で叫んだ。

その時だ。靖子がうれしそうに話しかけてきたのは。

「私たちの班、たくさんゴミを拾ってきたのよ。」

ぼくはどうしてそんなにうれしそうなのか疑問に思った。理由を聞くと、靖子は

「だって、たくさん拾うと、自分の頑張りが袋にいっぱいしまったみたいでうれしいじゃない。」

と答えた。すると美咲も「そうだよ。たくさんご

みを拾うってことは、私たちが住んでいる地域や学校の周りがきれいになるってことだよ。」

と笑顔で話を続けた。

給食の時間、お昼の放送が始まった。

「今日のごみ拾い活動、お疲れ様でした。活動を始めて三年目ですが、今までで一番集まりました。」

「それでは、各地区の集めたゴミの量を発表します。まず北地区からです。」

次々に地区の名前が発表されていく。朝は不満そうに話していた健太と裕斗も、どちらの地区が多く拾ったか放送を聞きながら競い合っていた。

「うわ、負けた。」

と健太が言うと、裕斗は少しうれしそうな笑みを浮かべた。そんな様子を見ていたぼくも、自分の地区が呼ばれるのを少しドキドキしながら待った。

「続いて、南地区です。」

(ぼくの地区だ！)

「南地区は二十五kgで、最も多く集まりました。お疲れ様でした。」

ぼくは思わず「一番だ。」と声を上げてしまった。健太も裕斗も悔しそうな顔をしている。美咲や靖子は「すごいね。」と言ってくれた。しかしぼくは、みんなの顔を見ているうちに少し複雑な気持ちになった。

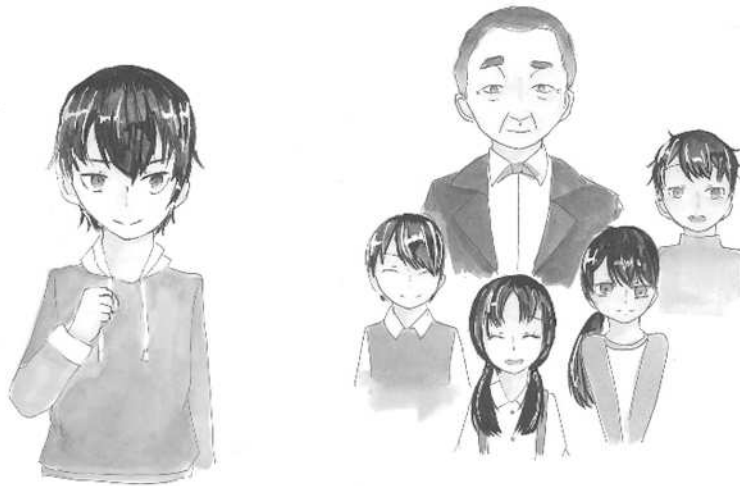


「続いて、大島先生の話です。」
「今日は、社会のために力を尽くした人、渋

沢栄一翁について話をします。栄一翁は、体の不自由な人々や身寄りのない子どもたちのために、東京養育院という施設をつくりました。栄一翁は毎月必ず足を運んでいて、特に子どもたちにはお菓子を持っていていき、『自分が親代わりになるから、勉強に励みなさい。』などと声をかけていたそうです。見返りを求めず、栄一翁が亡くなる九十一歳の年まで、約六十年間にわたって院長を務めました。」

ぼくは家に帰ると、朝のゴミ拾いの量が一番になったこと、それと渋谷栄一翁のことを家族に話した。すると、お父さんがにこにこしながら渋谷栄一翁の本を取り出し、ぼくに渡してくれた。その夜、ぼくはこの本を読んだ。読み進めていくうちに次々と自分の考えが塗り替えられるっていくのを感じた。ぼくは特に栄一翁の「社会で生きていくにあたって、自分のためはもちろん、社会全体のために働き、できるだけよい行動を示し、世の中の進歩を図りたい

と気持ちをもち続けてきた。」という言葉が印象的だった。ぼくは、ゴミ拾いの活動の取り組み方について、今度の学級会でみんなと話し合ってみたいと思った。



令和二年三月 渋谷栄一翁ころざし読本編集協力委員会作成

煮^にぼうとう



煮ぼうとうの給食づくり



11月11日の「[※]にぼうと会」

「これから毎日、朝と業間休みにサッカーの練習をします。全員参加してください。」
 隣の学校とのサッカー大会に向けて、学級会で話し合った結果、ぼくはクラスのキャプテンになった。やるからには勝ちたいと、練習計画を立て、帰りの会でみんなに説明した。
 最初は全員が参加していたクラス練習も、一週間たつと、数人が練習に来なくなった。ぼくは、(帰りの会でちゃんと言ったのに、勝手に参加しないなんてふざけるな。)と思っていた。
 ある日の朝、教室に戻る途中、一緒に練習していた浩平が声をかけてきた。
 「あのさあ、和也、毎日、朝と業間休みの両方とも全員参加って、少し厳しくないか？」
 「サッカー大会勝ちたくないのかよ。」
 「そりゃあ、勝ちたいけど……。」
 浩平は不満そうな様子で黙り込んだ。

業間休みの練習が終わり、教室にもどると、練習に来ていなかった女子が楽しそうに笑いながらおしゃべりをしていた。

「なんで練習に来ないんだよ。勝手にさぼってないで、練習に参加しろよ。」

「さぼってるわけじゃないわ。キャプテンだからって言いすぎよ。それに、練習内容だって、サッカーをやってない子にはきつすぎるってこと、わかってるの？」

ぼくは、ドキツとした。言い返す言葉が見つからずに、席に着いた。

次の休み時間には、圭一が

「練習に来なくなった人たちに、どうしたのか聞いてみようよ。一緒にやろうよって声をかけようよ。」

と話しかけてきた。

「うん……。」

あいまいな返事をするぼくの顔を少しのぞきこみながら、光男は、
「キャプテンだろ、たよりにしてるぜ。」
と言って、自分の席に戻っていった。
(みんな言いたいことを言って……。どうしろっていうんだよ……。ぼくは、キャプテンに向いていないんじゃないかな……。)



次の日の朝、少し早く学校に着いたぼくは、先生のところへ行った。先生は、

「クラスみんなが和也君を選^{えら}んでくれたんだ。厳しく言うのは、キャプテンと認^みめているから、思いを伝えてくれているんじゃないのかな。キャプテンをやめる前に何かできることはないか。」

と言って、ぼくの肩^{かた}をポンとたたいた。

ぼくは、「はい。」と小さくうなずいたが、心は少しも晴れなかった。

その日の給^{きゅう}食^{しょく}の時間、煮^にぼ^うう^{とう}が出た。ぼくは、だまって食べながら放送委員の話を聞いていた。

「深谷市の郷土料理『煮^にぼ^うう^{とう}』をこよなく愛していた人を知っていますか。渋沢栄一翁です。栄一翁は、東京から地元深谷に帰ってきたとき、『ぜひ、煮^にぼ^うう^{とう}が食

べたい』と言って、「中^なの家^{かんち}」で地元の人と煮^にぼ^うう^{とう}を一緒に食べました。ふるさとの味が懐^{なつ}かしかったからと言われています。『煮^にぼ^うう^{とう}などの野菜^{やさい}を使った料理が何と云ってもふるさとが一番のごちそうだ』と言って、地元の人たちへの気配りをしていたのではないかとも、言われています。皆^{みな}さんも、



どうか栄一翁のまごころと思いやりの精神^{せいしん}について考えながら、煮ぼうとうを味わってみてください。」

（ああ、そういう思いやりもあるのか。）

ぼくは、渋沢栄一について、改めて知りたくなった。

ぼくは、すぐに図書室に行き、渋沢栄一翁の伝記を借りた。

家に帰ると、すぐに渋沢栄一翁の伝記を読み始めた。お母さんの優^{やさ}しさをうけつぎ、小さいころからいつも困^{こま}っている人がいるとだまって見ていられない性格や周りの人の幸せを考えて一生懸命^{いっしょうけんめい}生きる姿にぼくは引きこまれていった。さらに『自分のことを厳しくいってくれる人こそが、実は自分を育ててくれている』という言葉には、はっとした。そして、心の中で何度も繰り返した。

キャプテンとして自分にできることは何か、ぼくはもう一度真剣^{しんけん}に考えてみることにした。



※「にぼうと会」について

「煮ぼうとう」は、地域によって「にぼうと」といいいます。

いささかなりとも働いてこそ



平成23年3月11日 しまのこし
東日本大震災後の島越漁港
〔田野畑村役場 所蔵〕

平成二十三年三月十一日。東日本大震災の地震や津波による被害で多くの方が犠牲となった。ニュースでは、被災した方々は住んでいた家を流され、学校の体育館や公民館などの避難所で不自由な生活をしていること、食料や衣類、日用品はもちろん、教科書やノ

ート、文房具などの学用品なども流されてしまったことなどが伝えられていた。

高志の学校でも、さっそく児童会を中心に、義援金を集める活動を行うこととなった。高志は代表委員として、帰りの会で、クラスのみんなへ協力を呼びかけた。

「代表委員会で決まったことを伝えます。被災した方々のために、義援金を集めることになりました。協力をお願いします！」
クラスのみんなも、高志の話をうなずきながら聞いてくれた。

家に帰り、高志は母に募金のことを話した。
「今度、学校で義援金を集めることになったんだ。たくさんのお金を集めて、被災地へ送りたいな。」

「とても大切な活動ね。たくさん集まるといいわね。」
母も笑顔で答えてくれた。

その後、一週間の募金活動を通して、学校全体で約三万円が集まった。高志は、もったくさん募金が集められないかと考えた。

夜のニュースでは、各地のボランティア



団体による義援金活動をはじめ、社会で活躍している有名人や大きな会社の経営者がこぞって信じられないほどの金額の寄付を申し出ていることが報道されていた。（すごいな：……。ぼくたちが、学校で集めた金額の何万

倍になるだろう……。）

少し考えた後、高志は一緒にニュースを見ていた母に、話しかけた。

「ねえ、どう思う……。やっぱり義援金は大人がやるべきなのかな……。学校でやる義援金集めなんて、あまり意味がないのかな……。」



すると、母は、今から百年近く前に関東地方をおそった関東大震災のときに、深谷市出

身の渋沢栄一翁が、どんなことをしたか、どんなことを考えて生きていたかについて、話してくれた。

大正十二年九月一日、大地震が関東をおそった。直後の火災と津波で約十万人の犠牲者を出した。当時、水も食糧もない東京にいた八十三歳の栄一翁の身を案じた家族は深谷に戻るようにすすめたが、「こういう時には、私のような老人でも、いささかなりとも働いてこそ、今まで生きている申し訳が立つようなものだ。」と家族に話し、被災者とともに震災に立ち向かったという。

そして、物を元通りにするためには、心を元通りにすることが必要であると考えていた栄一翁は、「だれかに何かをしてもらうことを考えるのではなく、今の自分なら何ができるかを考えることが大切である。そして、そ

れを行動にうつす勇気をもつこと。それが日本の復興へとつながるはずである。」と話していたという。

話を聞き終えて、高志は顔が赤くなるのを感じた。同時に、学校で募金に協力してくれた一人一人の顔と何かしようというすべての人たちの顔が重なった。（みんな、同じなんだ……。）高志は、何かに励まされるような気がして、みんなのために自分にできることは何かを考えた。

次の日、高志は児童会の人たちに提案をした。高志の考えた「被災地に送る文房具の募集」と書かれた提案書の最後には、次のような言葉が書かれていた。

『被災地の皆さんに寄せ書きを送りましょう。そして、物だけでなく心も届けましょう。』



平成二十三年三月十一日の東日本大震災後、深谷市内の小・中学校からも、義援金をはじめ、さまざまな形で被災地への『気持ち』を届けました。特に、姉妹都市である岩手県田野畑村へは、はげましの言葉を寄せ書きした百匹の『こいのぼり』を贈りました。

令和二年三月 洪沢栄一翁ごころざし読本編集協力委員会改訂

至誠しせいの人 尾高惇忠おだかじゆんちゆう

みなさんは、平成へいせい二十六年に群馬ぐんま県の富岡とみおか製糸場せいしじょうが世界文化遺産いさんに登録とうろくされたのを知っていますか。

富岡製糸場は、国が作った日本で初めての大規模きぼな機械式製糸工場しよだいです。その初代工場長で設立を任されたのは、深谷市出身の尾高惇忠という人でした。

建物たてものに使うレンガやガラスもまだ日本ではめずらしい時代でしたので、フランス人の指導しどうを受けながらも、苦勞くろうの連続れんぞくでした。

何より、大工場建設だいこうじょうけんせつを目の前にし、地元の人たちの間では、見たこともない異国人いこくへのおそれと不安が高まりました。国の事業ですから命令めいれいして人々を従したがわせることもできたのですが、惇忠は相手の意見や考え方を聞き、

一つ一つていねいに説明せつめいをし、不安を解消かいしょうしていききました。その誠意せいいある言動が、接せつする人に安心感あたを与えました。そして、ついに製糸場建設けんせつは始まりました。



ようやく完成間近まぢかとなりました。明治政府は、若い女性に機械で生糸をつくる西洋式の技術をおぼえさせ、日本中に広げようとした。そこで、働く工女こうじよを募集ぼしゆうしましたが、なんと一人も集まりません。調べてみると、

「若い娘ばかりを募集しているのは、その娘から生き血を取って飲むためだ。」
というわさが広がっているのです。指導者のフランス人たちが飲むブドウ酒を、地元の人が生き血と思いこんだことが原因でした。八方手をつくして根も葉もないうわさと説明しても、このうわさは消えませんでした。



工女が集まらなければ、富岡製糸場の仕事は始まりません。これまで様々な困難を乗り越えて完成した工場です。何としても工女を集めなければなりません。

（これまでのみんなの努力がむだになっしまう。まちがったうわさを消すために、娘の”ゆう“を工女第一号にしてはどうか。

しかし、”ゆう“はまだ十四歳。家をはなれ、遠く群馬の地に住み込みで働くことを納得してくれるだろうか。）

惇忠は工場長としての責任と最愛の娘”ゆう“のことを考えながら、深谷の家へと歩いて向かいました。

惇忠は、家に着くと、背筋を伸ばし、娘の”ゆう“に向かって話し始めました。

「生糸作りを西洋式にして、世界の進んだ国と同じように日本を豊かな国にしようと思

い、工場長を引き受けた。沢山たくさんの人の協力きょうりよくでここまでできたが、富岡製糸場で人間の生き血を飲んでいるというわさが流れ、工女が一人も集まらない。このままでは、製糸場の仕事が始まらない……。そこで、

”ゆう“……。”

いつも、自分のことより相手のことを考えている父がどんな思いで自分に話しているのか、”ゆう“には痛いほど伝わつたってきました。

「私わたしでも工女になれますか。」

「おお、なれるとも、なれるとも……。」

”ゆう“、ありがとう。」



工場長自ら自分の娘を工女とした決断けつだんは、娘の生き血を取るとのうわさがまちがいであったことの証明しやうめいになりました。安心した深谷の少女達は進んで工女となることを希望きぼうしました。これがきっかけとなり、他の地域からも希望者が増ふえ、富岡製糸場の仕事を始めることができました。

それから百五十年近く経たった今も、富岡製糸場の建物は、ほぼその当時の姿すがたで残のこっています。



工女について

明治政府は、当時最新の工場であった富岡製糸場で技術を身につけ、いずれは各地の製糸場で指導者としてその技術を広めてもらおうと考え、多くの工女を募集しました。

レンガづくりへの思い

ぼくは今年の夏休みをとっても楽しみにしている。旅行もあるし、友だちとも遊べる。けれども、何よりも楽しみにしている理由は、今年こそ自由研究を本気でがんばってみようと思っているからだ。



去年までのぼくは、（テーマを決めるのは難しいな。実験も時間がかかって大変だ。）と、本やインターネットで自由研究のテーマを探し、誰かがやったようなものの真似をし

ていた。実験したものを一日、二日で急いでまとめ、自分の作品として出すことで自由研究を終わらせていた。

しかし今年はちがう。自分で疑問に思うことを夏休み前から書きたためである。今年こそ本気で研究に取り組んでみようと思っている。

きっかけになったのは、一学期におこなった社会科の調べ学習だ。先生が、「渋沢栄一記念館には栄一翁の業績だけでなく、富岡製糸場の建設に関わった深谷の三偉人の資料もあります。」

とおっしゃったので、渋沢栄一記念館に行ってみた。記念館にある展示物の中で、ぼくは赤茶色で角が少し欠けている三つのレンガが展示してあるのを見て立ち止まった。それは、実際に富岡製糸場で使われていたレンガだっ

た。

そのレンガは、にらづかなおじろう 葦塚直次郎という人が関係したということがわかり、ぼくは、直次郎について調べてみた。

直次郎は深谷の明戸出身。あけと 富岡製糸場を建てたために、深谷のかわら職人しよくにんや大工だいくを連れて富岡に向かった。その当時、外国には赤茶色のレンガを使った建築物けんちくぶつがあった。富岡製糸場の壁にも同じものを使う。初代工場長しよだいとなる尾高惇忠おだかじゆんちゆうは、直次郎に丈夫じやうぶなレンガ作りのために必要な深谷のかわら職人ひつようを集めるよう頼んだのだ。

直次郎とかわら職人は、レンガを作るのに大変な苦勞くろうをした。かわらとレンガでは同じような粘土ねんどを使っても他の材料ざいりようの配合はいごうが違う。しかも直次郎にとって富岡は慣れない土地のため、レンガの材料になる粘土を探すこ

とからスタートしなければならなかった。幸さいわい粘土は富岡から近い甘楽町かんらまちで見つけた。次はレンガを焼くための、かま作りをしなければならぬ。そこで、粘土がとれる場所の近くにかまを作った。

道具がそろい焼き始めたが、かわら職人にはレンガ作りの知識ちしきがない。何度焼いても、どうしても形がそろわず、もろいレンガができあがってしまう。もろいと、大きな建物が建てられない。初めてのレンガ作りは失敗の連続だった。しかし、直次郎は、深谷から一緒に行ったかわら職人と富岡のかわら職人いっしょ、そしてフランス人技術者と、一度焼いては話し合い、話してはまた焼く、という作業を何度も何度もうくり返した。



直次郎は、実験もくり返した。見本のレンガを細かく砕き水に入れ、下にしずむ砂すなつぶの割合わりあいを見たのだ。その砂の割合、練り、かまの温度など、調整に調整を重ね、とうとう富岡製糸場の壁になる、赤茶色の丈夫なレンガを作り上げることができたのだ。

（あのきれいなレンガを作るために、たくさんくふうの苦労といろいろな工夫をしたのだな。本当にすごい人だ。）ぼくは感心するのと同じ時に、心の奥おくに熱いものあつを感じた。それは、

ぼくにも同じことができるかもしれない、という思いだった。

ぼくにとつての今年の夏休みは、今までよりもあつくなりそうだ。



渋沢栄一記念館には富岡製糸場を支えていた三つのレンガが保存されています。このレンガは、当時、葦塚直次郎や職人たちが試行錯誤しこうさくごのうえに作り上げたであろう、日本の繁栄はんえいを支えたレンガです。

和算の大先生藤田雄山貞資

みなさんは、和算を知っていますか。江戸時代の日本で独自に発展した算術（今の算数）で、鶴亀算や旅人算、ねずみ算などがあります。当時の和算の発展に大きく貢献した人が藤田雄山貞資です。

雄山は、幼い頃から父の仕事を手伝い、合間に本を読んだり、そろばんをしたりするなど、学問に熱心な少年でした。ある日、父が、

「お前は将来、どのような人になりたいのだ。」と雄山にたずねました。しかし、雄山は答えることができません。悩んでしまいました。学問は好きでしたが、将来の夢について考えたことがなかったのです。



そんなある日のことです。雄山が住む本田村（現在の深谷市本田）に大雨が降りました。雄山の家の近くを流れる荒川は、大雨のたびに氾濫しましたが、この日はいつも以上に、多くの被害を出しました。川の氾濫に悲しむ、村の人々を見て、雄山は、心を痛めました。（どうしたら、被害を減らすことができるのだろうか。）そう考えていた雄山は、算術が新田開発や測量、検地などに役立つことを知ると、得意の算術を究め、広めることに夢をもったのです。

すぐに雄山は、父にそのことを話しました。そんな雄山に、父は、学問で身を立てることの厳しさを説きました。この時代は、算術で生活していく人などほとんどいなかったからです。雄山は、それでも、「わたしは、世の中の役に立ちたい。お父様、どうかわたしに、算術をもっと学ばせていただけないでしょうか。」と頼みました。学び続けることの大変さを知りつつも、父は、雄山の意思の強さを感じ

じ、うれしく思いました。

雄山は、算術の先生として有名な、今井兼庭先生に弟子入りすることになりました。学ぶために往復十里（約40キロメートル）の道のりはあるものの、雨の日も風の日も、雄山は休まず通い、一生懸命学び続けました。遠い道のりを心配する声があっても、雄山は愚痴一つ言いません。むしろ、その表情は、いつもうれしそうでした。

そのかいあって、雄

山の算術の実力は、とびぬけたものとなりました。



そんな雄山に、うれしい知らせが舞い込んできました。江戸で、算術の先生として有名な山路主住先生のもと、多くの仲間たちと一緒に学ぶことになったのです。雄

山は、うれしくてたまりません。

こうして、江戸へ出た雄山でしたが、学問で身を立てることは、とても困難なものでした。田舎で学んできた雄山以外は、算術だけに集中できる環境で学んできた、優秀な仲間たちばかりだったのです。（わたしのような田舎者が、本当にこの江戸で成功できるのだろうか・・・）雄山はくじけそうになることが何度もありました。そんな時はいつも決まって、自分の夢や故郷の家族のことを考えました。そして、他の誰よりも努力しました。寝る間も惜しんで、たくさんのお本を読んだり、算術の問題を解いたりしたのです。雄山は、難しい問題でも、決して投げ出すことはありませんでした。

目覚ましい進歩をとげる雄山に、山路先生が仕事を紹介してくれました。算術の勉強をするだけでは、お金にはならず、父が送ってくれるお金で、雄山は生活をしていくからです。

雄山は、幕府天文方（江戸幕府から依頼された天文の研究機関）の仕事を、手伝わ

せてもらえることになりました。

天文方の仕事を、必死でつとめながらも、毎日算術の勉強をつづけました。

ある日、雄山は、山路先生に呼ばれました。

「君の長年の努力を認め、印可状を与えよう。」

雄山は、弟子の中でも最もすぐれている者のみに与えられる免許状をもらえたことを心から喜びました。

しかし翌年、雄山は眼の病氣にかかってしまい、天文方の仕事ができなくなってしまうしました。仕事をやめた雄山は、働くことができずに、眼の治療に専念する苦しい毎日でした。そんなときに、さらに悲しい知らせが雄山のもとに届きました。雄山の夢を応援してくれていた父が、病氣で亡くなったのです。次々と続く不幸に、雄山は不安でいっぱいの日々が続きました。そんなある日、雄山は印可状を見つめていると、支えてくれた人たちとともに学んだ仲間、これまでの努力の日々が、次々と頭に

浮かんできました。（わたしには、算術があるじゃないか！）そう強く思い、改めて、算術をもっと詳しく学んでいこうと決心しました。そこには、学問の発展を願う雄山の姿があったのです。



そんな研究熱心な雄山は、江戸で算術の先生になりました。

先生として、雄山は研究の成果を本にまとめました。中でも「精要算法」は、多くの和算家の学習に使われました。そんな雄山のもとには、全国からたくさんさんの弟子が集まり、弟子たちとともに学び続け、日本を代表する和算の大先生になったのです。